あの角を曲がれば

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの角を曲がれば

【Ｎコード】
Ｎ８９８７Ａ

【作者名】
並盛りライス

【あらすじ】
走ることは楽しい。例え、同じ道を走れなくなっても、僕は走り続けたい。でも、今日だけは君の横を走りたい。長距離ランナーの物語。

走っている間は、すべてを忘れられた。

僕達が空の底に沈殿しているってことも、酸素が欲しくて口をパクパクしながら必死で生きているってことも忘れられる。

慣性から離れる一瞬の解放感と爽快な自由が、走っている間は訪れる。

けれども僕らは、いつまでも走っている訳にはいかないのだ。いつかは運動は失速して静止しなければならない。

生きている限り、僕らは動き続けることはできないのだ。

それは生き物であることの宿命であり、呪いである。

そのことを思い出すために息をしているのだ。

また、僕らは歩き始める。息を切らしているのは僕と、伸也ぐらいで、他の部員達は体を暖める程度の走りだった。

ダラダラと走るくらいなら、僕は間違いなく走るのを止める。

伸也も同じだろうか。

校庭は広く空虚で、湿った空気が鈍い流れの中で停滞している。

走っても、湿った空気が顔に当たるぐらいで、案の定、皮膚が不快感を感じていた。

汗の染み込んだタオルを冷水で冷やして絞る。顔に当てたり腕に当てたりしているうちに温くなる。

いろいろな陸上競技に挑戦したが、長距離ぐらい気持いものはない。

最初は短距離を走っていた。けれど、あまりにも短い自由に嫌気がさして中距離と長距離を掛け持ちするようになった。

早く走ることよりも、走っている時間が長い方がいい。

タイムなんて気にならなかった。ただ、走ることに意味を見い出していた。

明日は、毎年恒例の春のレース。新入生の初舞台であり、一着になった者は学年に関係なく部長になれる。

我が陸上部は、下克上なのだ。

過去に何度も才能のある一年が部長に選ばれている。

しかし今年は、目の上のたんこぶである三年はかなり速かった。

現部長を筆頭に、上位四名までを三年が独占している。

去年は、十三位。伸也は八位だった。

伸也は今年こそ、一着を狙ってくると思ったが意外と冷静だった。

僕はもちろん一着を狙っていく。じゃなきゃ、面白くないだろう。

一年は、才能のあるヤツも、此れから伸びそうなヤツもいるが、一着を取れるかどうかは微妙な線だ。

とはいえ、実力不明のルーキー達に抜かれることは避けたい。

練習は静かに熱が篭っている。誰もが、明日のレースの事で頭がいっぱいなのだ。

短距離に転向しないか？

と言われたのは昨日だっけ？肯定も否定もしなかったが、監督はどう思ったんだろう。

昔、短距離を走っていた。そこそこ速かった。

短距離選手が少ない。

それだけだろう。

僕らに下される評価はいつもそれだけ。

認められたいとは思わない。ただ走りたいというのが僕の本音。

それでも、僕が必要とされないのは悲しい。

短距離を惰性で走る位なら陸上なんて辞めてしまうのが一番だ。
集中したトレーニングができないまま、僕は走った。
部長の声で、気が付くとみんなからは少し離されていた。
まだ追い付ける。でも、いつか追い付けなくなるのかもしれない。
その距離は、こんなもんじゃないだろう。ただ走りたいだけの僕と、
本気で大会を目指すみんな。

最後の追い上げで、なんとか半分の中には入った。
足がほどよく痛い、心は酷く痛かった。
あぁ、なんで本気になれないのかなぁ。なんて思ったりもしてる。
でも、走ることは楽しい。

朝起きると、空はまだ暗くて、嘘みたいに雲のない晴れだった。
漫画本の棚の下段からジョギングシューズを取り出した。
子供の頃に、短距離で一番になったときの表彰状が背中を丸めて棚
に横たわっている。

栄光の死体。ふと、そんな言葉を思い付いた。

あれから、賞はとっていない。次第に、賞をとりたいという意欲も無くなっていった。

それでも走っていたいと思うのは、なぜだろうか？

走らない日常が怖いのか、その余った時間が退屈だからか？

走るのが楽しいからに決まっている。答えはいつも近くに鎮座している。

それすら無くなったら、僕はこの表彰状のように、縮まって、紙屑のような毎日を生きるんだろう。

玄関をそっと開ける。誰かを起こさないように、ゆっくりと開ける。

近所で馴染みの犬が尻尾をふっている。とれてしまいそうなぐらい必死に。

必死に生きることは素晴らしいと思う。でも、必死に生きた結果、何も残らないのは惨めだ。

最初の角を曲がると、ドラッグストアーが見える。

最近できたばかりで、食品や飲み物なんかも売っている。

このドラッグストアーが建つ前には、小さな薬屋があった。古めかしいカエルが口を空けているのは、一度みたら忘れられない。

走ることを止めたら、息をしなければいけない。
地面に足を着いた瞬間、僕は歩きだしていた。
走れと風が叫んで、地面がヒンヤリと空気を舞いあげた。

午前十一時。走る選手が一列にならんで、各自、体を暖めている
その中に伸也を見つけて、手を挙げた。
こちらを見た伸也の顔は真剣で、敵意と闘争本能が見えていた。
でも、僕の心には勝ちたいという気持ちや、伸也を負かしたいという気持ちは湧かなかった。
真剣なことは変わらなかったが、走る時はいつも手は抜かなかった。
スタートの合図と同時に、僕達は地面を離れた。
一人だって遅れた選手はいない。
初めからトバす選手。
後で追い上げる選手。
一定の早さを保つ選手。
僕は、後で追い上げる選手で、伸也は初めからトバす選手だ。

距離は開く。いつもと同じように、前の選手が遠くになっていく。

体調は良好。

天気も、ちょっと暑いぐらいで良好だ。

一年も必死に喰らい付く、三年の背中もまだ、目につく。

このレースは、比較的緩やかな下り坂のストレートで始まり、どんなに遠くても視界に前の選手が見える。
だが、最初のカーブを曲がると徐々に見えなくなる。
カーブを曲がった時に先頭の選手が見えなければ、一位には、なれないと言われている。

何度か通ったこのコースをいつもと同じように走る。
熱くなってペースを崩さないように、保っていく。

風を感じる。

空気の流れに乗っていく。
恐いものなんてない。

走ることは楽しい。

才能。努力。競争。順位。
才能。努力。競争。順位。
恐いものは何もない。

走ることは…。

最初のカーブが見えてくる。

少し、足幅が広くなる。

前しか見ていない自分を感じる。

あの角を曲がれば、伸也の背中が見えるだろうか。

スピードが加速する、そんなはずはないのに気持ちだけが加速している。

視界に映ったのは、次のカーブを先頭で曲がる伸也の背中が消えていく所だった。

走ることは楽しい。

明日からは違う道を走っているかもしれない。

でも、今日だけは伸也の横に並んでみたいと強く思った。

僕は加速する。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8987a/

あの角を曲がれば

2010年12月11日11時46分発行